

人獣共通感染症に関連した輸入真菌症

佐野 文子

千葉大学 真菌医学研究センター

人獣共通真菌症として、動物との接触により皮膚糸状菌に感染することはよく知られている。特に最近の動物の飼育形態は伴侶動物として屋内での共同生活も増え、従来から飼育されていた動物に加え輸入されたエキゾチックペットの飼育が流行していることから、新たなる原因菌による人獣共通感染症の発生が危惧されている。最近、輸入ハリネズミより本邦で未報告であった皮膚糸状菌が分離され、その保菌率を調べたところ約40%の個体に蔓延しており、ついにはヒト感染例も確認されたことはその1例である。

輸入小動物の多くの種は関連機関や獣医師による健康管理を受けずに飼育されていることが多く、残念ながら現況では、これらの動物を介して輸入感染症の原因菌が本邦に持ち込まれた場合、拡散阻止体制は確立されていない。このような状況をふまえて、特に真菌症として危険度の高い輸入真菌症5症（コクシジイデス症、ヒストプラズマ症、パラコクシジオイデス症、マルネツフェイ型ペニシリウム症、ブラストミセス症）について、動物との関連性をのべる。

*Coccidioides immitis* を原因菌とするコクシジオイデス症は各種動物が罹患することが知られ、家畜、海獣のみならず爬虫類でもその感染や保菌が知られている。本邦ではヒト症例のみ報告され、今のところ動物での発症は報告されていないが、流行地で飼育された動物の輸入には細心の注意が必要である。

ヒストプラズマ症も各種動物の感染や保菌が確認されている。原因菌の *Histoplasma capsulatum* は宿主特異性と地域特異性があり、菌の棲息はコウモリやヒバリなどの糞と関係している。本邦では海外流行地に渡航して感染したヒト症例と、一部のヒトおよびイヌ、ウマ症例のように国内感染が示唆される症例が混在している。本邦が流行地に含まれることの裏付けとして、戦前はウマのヒストプラズマ症の「仮性皮炎」の流行地であったことがあげられる。ちなみにウマの場合、「仮性皮炎」と診断されれば「届出伝染病」である。

パラコクシジオイデス症は *Paracoccidioides brasiliensis* を原因菌とし、アルマジロが自然界での保菌動物であり、イヌへの感染も疑われている。マルネツフェイ型ペニシリウム症は *Penicillium marneffeii* を原因菌とし、数年前に飼育の流行したコタケネズミが自然界での保菌者である。ブラストミセス症は *Blastomyces dermatitidis* を原因菌として、ヤマアラシの針毛に原因菌が付着していることが知られており、イヌが感染することはよく知られている。本邦ではヒストプラズマ症以外、動物で輸入真菌症に分類される真菌症が確認されたとの報告はないが、今後注意を要する。

---

Imported mycoses related to zoonoses

AYAKO SANO

Research Center for Pathogenic Fungi and Microbial Toxicoses, Chiba Univ, Chiba, Japan